

物構研特別シンポジウムを開催

放射光科学研究施設長 村上洋一

12月17日、KEK 小林ホールにて、物構研特別シンポジウム「物質・生命科学における大学共同利用～物構研のあり方を問う～」が開催されました。

物構研は、つくばキャンパスでは放射光施設フォトンファクトリー (PF) と低速陽電子施設、東海キャンパスでは、J-PARC の物質・生命科学実験施設 (MLF) の中性子とミュオンという量子ビーム施設を擁し、大学共同利用を推進する研究所です。

時代の変遷とともに大学共同利用の位置付けも変わりつつありますが、このような先端的大型施設は、幅広い分野のユーザーにいか「利用」されるべきか、またいかに「育成」され、施設として最大限の成果を創出すべきか、という観点に立ち返って議論をする場として、この物構研特別シンポジウムが企画されました。今回は、大学共同利用施設および共用促進法が適用される施設、それぞれの歴史的経緯や現状をお話いただいたうえで、物質・生命科学分野の大型施設の将来像について、パネルディスカッションを含めて議論を行いました。特に、将来を担う人材育成の問題については、さまざまなアイデアや活発な意見交換がなされました。この議論は、すぐに何らかの結論が出せるようなものではありませんが、議論を深めていくことにより、大型施設のあるべき姿について、今後もシンポジウムは継続し、議論を深めて方向性を見いだしていくことになっています。



図1 挨拶をする山田物構研所長 (左上)、村上放射光科学研究施設長 (右上) と会議の様子 (下)。

第5回北海道大学・KEK 連携シンポジウム報告

放射光科学第二研究系 足立伸一

1月16、17日の二日間にわたり、高エネルギー加速器研究機構4号館セミナーホールにおいて、北海道大学とKEKとの連携シンポジウムが開催されました。このシンポジウムは北大-KEK連携協力協定に基づき、加速器科学を基盤とした相互連携研究の推進を目的として北大とKEKで毎年開催されているものです。プログラムの詳細は <http://imss.kek.jp/seminar/symposium/2014/0116/index.html> をご覧下さい。

16日に開催したシンポジウムの第1部「最新加速器技術と新規量子ビーム源の可能性」では、コンパクト ERL によるレーザー逆コンプトン X 線の発生とその理論的背景、電子加速器による中性子の発生、レーザー逆コンプトン γ 線による偏極低速陽電子ビームの発生など、新しい量子ビーム源の可能性について議論されました。

また17日の第2部「表面の構造と電子状態 — 全反射高速陽電子回折・角度分解光電子分光・超低速ミュオンと触媒研究」では、表面構造と触媒反応の計測をテーマとして、全反射高速陽電子回折 (TRHEPD)、超低速ミュオン、光電子分光、時間分解 XAFS など、複合的な量子ビーム計測手法を用いた研究例が報告されました。

次回第6回は、2015年度に北海道大学にて開催される予定です。



図1 会議の様子 (上) と集合写真 (下)。